第 58 回シェイクスピア学会　パネル・ディスカッション（2019 年 10 月 6 日）
近代初期英文学と女性

司会・講師：　竹村はるみ(立命館大学教授)
講師：　岩田美喜(立教大学教授)
塚田雄一（同志社大学准教授）
浜名恵美（東京女子大学教授）

本パネル・ディスカッションでは、女性やジェンダーの視点から近代初期英文学を巨視的かつ微視的に考察することを目的とした。シェイクスピアに限定せずに、あえて近代初期英文学に射程を広げたのは、領域横断的な視点やアプローチを提示する場を提供することによって、より大きなシナジー効果を期待できると考えたためである。近代初期英文学は女性にいかなる形を与えているのか。そして、女性は近代初期英文学にいかなる作用を及ぼしたのか。女性を中心化する視点を介在させることによって立ち現れる近代初期英国の文化と文学の輪郭を示すという共通テーマを掲げる中で、3 つの批評軸が浮かび上がった。作品の中で女性がどう描かれているかという表象の問題、近代初期の女性は文学をどう受容したのかという視点、作者としての女性を問う視座である。

塚田は、17 世紀初頭に相次いで上演されたテューダー朝を舞台にした劇作品――特に Thomas Heywood, *If You Know Not Me, You Know Nobody, Part I*、Samuel Rowley, *When You See Me, You Know Me*、Thomas Dekker, *The Whore of Babylon*――に焦点を当て、政治的な女性表象が構築されるプロセスを考察した。これらの作品にはカトリック勢力からプロテスタンティズムそしてイングランドを守る女性たちが表象される。これらの女性表象はジェイムズ一世の治めるイングランドにおいてプロテスタンティズムの重要性を再確認する役割を担わされる一方、手放しに理想化されているわけではなく、男性社会への潜在的な脅威とならぬよう＜無害化＞されている。特に男たちを従える女性権力者（軍人女王や妖精女王など）としてその権力や女性性が称揚される場合には、表象対象を貶める力も同時に働き、表象対象が必要以上に男性社会や男性性への脅威にならないよう抑制がかけられている。本発表において、塚田は、女性君主から男性君主への権力の移行によって女性権力への不安や懸念がより明確な形で表現されるようになったことを指摘した上で、これらの女性表象の背景に当時これらの作品が上演された劇場の観客層への配慮もあったのではないかという可能性を検討した。

岩田は、トマス・ミドルトンの初期の作品における女性表象に関する比較分析を行った。ミドルトンの女性表象について流布しているのは、彼は年とともに女性への理解を深めたという発展的ミドルトン観である。本発表はこれに対し、作家の個人的な成熟とは別に、ジャンルが要請す

る表象のあり方があるのではないかと考え、『ミクルマス開廷期』、『おかしな世の中ですよね、旦那方』、『古狸を引っ掛ける策略』という初期喜劇 3 作を取り扱い、そこに登場する女性たちの描かれ方を分析した。悲劇においては、一度「娘から妻へ」という当時のキャリア・パスを外れた女性たちは皆「娼婦」として悲惨な結末を迎える。だがミドルトンの初期喜劇においては、処女を 15 回売りつつ、大団円で主人公フォリーウィットの妻の座に収まるフランク・ガルマンを筆頭に、多くの女性がいったんは社会規範を逸れていながら、安定した生活基盤を手に入れる。これは、彼の喜劇が全ての価値観を相対化するためでもあり、聖ポール少年劇団というそれ自体リミナルな演劇空間のために芝居を書いていたためでもあろう。ミドルトンは、喜劇というジャンルの要請と少年劇団とのコラボレーションを念頭におき、悲劇のドラマツルギーでは難しい〈解放〉の瞬間を、女性登場人物たちに与えることに成功していたのである。

竹村は、ロマンスの主要読者として女性を想定するステレオタイプが近代初期に始まることに着目し、特にエリザベス朝騎士道ロマンスにおける女性読者の表象を考察した。エドマンド・スペンサーの『妖精の女王』とサー・フィリップ・シドニーの『アーケイディア』は、いずれも特定の女性を念頭に置いて執筆され（前者はエリザベス一世、後者はシドニーの実妹ペンブルック伯夫人）、女性読者への直接の語りかけを多く含むことで知られる。本発表では、特に『妖精の女王』第 3 巻のビュジレインの館のエピソードを中心に取り上げ、「抵抗する読者」としてブリットマートを捉える従来のフェミニズム批評を踏まえた上で、その修正を試みた。傷を共有することでブリットマートとアモレットという対照的なヒロインが同化し、ブリットマートが能動的な読者として覚醒する場面には、共感するヒロインの英雄化というロマンス的モティーフの創出を窺うことができる。そして、その新たなヒロイン像は、騎士道ロマンスの模範的な読者のあり方をも規定することによって、男性読者とは明確に区別された女性読者を「内在化された読者」

として構築しているのである。

浜名は、パネルのテーマに関するディジタル・ヒューマニティーズ（以下、DH と略記）の最新動向と今後の展望について論じた。関連する主要ディジタル・アーカイブの中から、The Orlando Project (Cambridge UP)と Women Writers Project (Northeastern University)に焦点をあわせて、それぞれの特色、コンテンツ、研究事例を紹介してから、DH の特色と成果を 3 点にまとめた。１）初期近代英文学と女性の研究に、ＤＨは最適・最強の味方である。当時の女性が書いたものは購入者が少ないために出版することが難しいが、アーカイブに保存し公開することができる。また、手稿の画像だけでなく、TEI/XML でテクスト化して公開すれば、分析を行うことが容易になる。２）女性が書いたものの発掘、調査、考察に資する。３）当時の女性が書いた多種多様な作品（備忘録、作法書、料理の本他）は、男性作家を中心とする伝統的な英文学やジャンルの概念の再定義を要請する。最後に、今後の課題として DH の知識とスキルの習得、習得するための機会・センター等の構築、展望として DH 的アプローチの発展と革新的な英文学研究・教育の創出への期待を表明した。

以上 4 名の講師による発題に続くディスカッションでは、作者性とジャンルの関係、文学の受容形態の多様化の 2 点が主たるテーマとなった。「文学的作法(decorum)」が意識された近代初期文学においては、女性の表象もまた、個々の作家の女性観というよりも、ジャンルや読者層・観客層といった外的要因による影響を反映している可能性が高い。その一方で、単に既存の型や様式を踏襲するのではなく、そこから逸脱する作者の独自性を見極める必要もあり、女性の表象はこの点でもきわめて意義深い視点を提起するものと思われる。また、女性による近代初期演劇の受容に焦点を当てる場合、観客としてのみならず、出版物を通して戯曲を読む読者としての重要性にも留意する必要があり、多種多様なテクストを網羅する DH は今後の研究においてますます有効なリソースとなることが期待される。以上、女性と近代初期英文学の関係性をより多角的に検証する際の課題、問題意識、そして方法論的可能性を確認し、本パネルのまとめとした。